

浄土

3

1995

インドの人と宗教 小磯千尋

旅

南伊豆の海と山

夏 攸吾

特別寄稿

高齢者福祉が変わる

住吉俊彦

日本の特産 マス・エリート

倉田保雄

好評連載

関 容子 御所野洋幸 佐藤雅彦
内堀照夫

念仏と自由

大谷隆照



法然上人鑽仰会発行

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピーハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

0088-82 (無料) / 0120-0088-82 (無料)

受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。ご使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に“0088”を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

南伊豆の海と山

写真・夏・披露

盛大に水を噴いてイカが揚がってくる





船上にとりこまれたイカが陽に透ける



下田港の市場に水揚げされたヤリイカ

水仙の爪木崎から望む南伊豆の海



爪木崎に咲く水仙の花





たわわに実るオレンジ



浄土



1995/3月号 目次

[カラー口絵]南伊豆の海と山……………写真=夏 攸吾	3
インドの人と宗教……………小磯千尋	8
高齢者福祉が変わる……………住吉俊彦	16
南伊豆の海と山……………夏 攸吾	24
楽屋ゆかた ― ⑥	
松本幸右衛門(二)……………関 容子	32
日本の特産“マス・エリート”……………倉田保雄	38
教育の現場から……………内堀照夫	44
共に生きる ― ブナ原生林から ―	
……………御所野洋幸	52
念仏と自由……………大谷隆照	56
家庭への憧れと現実 ― 私のアメリカ留学記(最終回) ―	
……………佐藤雅彦	60
阪神大震災 緊急レポート(平尾弘衆)・義援金、ボランティアのお知らせ	68
新刊紹介・投稿募集……………	69
編集後記……………	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆貌下

表紙撮影=御所野洋幸

イラストレーション=柴 文人

インドの人と宗教

—ヒンドゥー教徒、ヴィジャヤーおばさんの死にのぞんで—

小磯 千尋

インドのカレンダーを見ると、宗教の多さを実感させられる。代表的な宗教の新年・祭りは祭日となる。その祭日も全インド的なもの、州別、宗教別と分けられている。主な宗教を挙げただけで、ヒンドゥー教、イスラーム教、キリスト教、ジャイナ教、仏教、ヒンドゥー教から分派したシク教、拝火教で知られるパールシー教、ごく少数のユダヤ教となる。ここではインドの全人口の八〇パーセント以上を占めるヒンドゥー教を中心に、話しを進めたい。

インドの町の辻々には、橙色に塗られた石が無造作に置かれ、大きな樹木の下に祠には、種痘の守り女神シータラー・デヴィーが、小石をシンボルに祀られている。現在ヒンドゥー教として親しまれている宗教は、古代のヴェーダ聖典を中心とした特権的宗教を、より庶民向けにするために、地方の土着的信仰を取り入れる過程で成立していった。特定の開祖もなければ、聖書のような教典もない。森羅万象に神が宿ると信じるなど、日本の神道に通じる点も見受け

られる。また、偶像崇拜も特徴として挙げられよう。インドの人々が描く神々のイメージは、とても人間的だ。神話の神々が、人々の生活の中で躍動していると言っても過言ではない。町には、極彩色で描かれた美男美女の神々のポスターが売られ、神々しいというよりもエロティックな女神像が並べられている。

ヒンドゥー教徒は、プージャーと呼ばれる祭祀を日常的に執り行う。大掛かりなプージャーはブラーフマン階層のパンディットと呼ばれる僧侶を招いて行われるが、日常的には家長が行う。家長は各家庭の祭司とも言えよう。祖霊崇拜も大切な家長の役目である。

基本的に人々は来世を信じ、来世の幸福のために今生で精進する。ヒンドゥー教徒の最終目的は、輪廻転生の鎖を断ち、解脱を得ることにあ

る。そのために、様々な学派が解脱に至る道について論争を重ね、難解なヒンドゥー哲学を展開させた。ヒンドゥー教徒は、理想的な生き方として、人生を四つの時期に分けて考える。それは四住期と呼ばれ、勉学に励む学生期、家族を養い富を蓄え社会に貢献する家住期、世俗を絶ち、内省のため森に棲む森住期、あらゆる拘束を絶ち、死に場所を求めて彷徨う遊行期とされている。現在これを遂行することは難しいが、人々の心の中には常にこの理想があるようだ。家督を息子に譲り渡すと、家のことには口を出さず、数珠を片手に唱名を行い、宗教書を読み、そして聖地を訪ね歩く老人が多い。さながら家に居ながら、森住、遊行期を実践しているように見える。こうして精進する姿は、平安そのものだ。インドの人々は老いとともに、魅力を増



女神に憑衣された女性、休みなく激しく踊り続ける。

すように感じられるが、これは死へむけての精進の賜物であろうか。

ヒンドゥー教の一番の聖地である北インドのバナールス（ベナレス）には、死地を求めてたどりつく老人が多い。自らの遺灰を母なるガンジス河に流してもらふことによって、今生の罪が清められるだけでなく解脱が約束されると信じるからだ。バナールスの町において、死はあまりに日常的だ。ガートと呼ばれる河に降りる階段式の沐浴場の近くに火葬場があり、その煙の絶えることはない。衆目を遮るものとしてない屋外で燃やされた遺体は、そのまま河に放られる。生前、約束ごとの多いプージャーを繰り返して行ってきた者たちの、その最後の儀礼はあまりにあっけない。死を隠蔽し、忌むこととして遠ざけている社会から来た者には、衝撃的な光

景といえよう。夕暮れ時、ガンジス河の風と豊かな河の流れに身を委ね、死体を焼く赤い炎を眺めていると、つい哲学的な思いにとらわれてしまう。旅先の感傷かもしれないが、本来的な死のあり方を教えられたようで、すがすがしささえ感じられる。死は誰にも避けて通れるものではなく、万人に共通に訪れるのだ。死は恐れるものでも、特別なものでもなく、日常の延長なのだ。死ぬことは、生きること以外ならないと、ガンジス河の光景は語っているようだ。

ヒンドゥー教では、家族も富も執着するものではなく、通りすがりの物に過ぎない。自らの肉体とて衣服のような物、ゆえに古くなったら脱ぎ捨てて新しい衣服、つまり別の肉体を得ようという。不滅なるものは、アトマン（個我）、靈魂である。人間という小宇宙と無限の大宇宙

の根本原理ブラフマンと同一であることを感得すること、つまり梵我一如の境地が解脱であると説かれる。ヒンドゥー教徒は、大局的にものとをとらえている。目先のことよりもより本源的かつ高邁な理想を求めていると言えよう。

インドで出会った知人の死から学んだものは大きい。日本では、癌の告知についてさかんに議論されているが、インドでは概ね本人に病名を宣告している。自分の運命があるがままに受け入れる彼らは、絶望することなく平常心を保ちながら最期を迎えているように見える。痛みと闘いながら、できるだけいつもと変わらぬ日常生活を送る。日本なら病院でチューブだらけにされ、延命措置がとられているような状態でも、インドでは家で療養して治療のために通院する。動物好きで心のやさしいヴィジャヤーお

ばさんは、咽頭癌のため口からは水さえも飲み込めなくなり、直接腸に管を通して食物をとっていた。ガリガリに痩せ細り、放射線療法で黒くなった首筋が痛々しかった。その間も何匹もいる猫や犬のために、インドの主食のチャパティーと呼ばれるパンを作り続けていた。勉強に追われ家事の手抜きをしている私のためにも、毎日のように料理を持たせてくれた。その思いやりと精神力には圧倒され通しだった。病人を煩わせることを気にして、ゆっくり休むように言うと、悲しそうな顔をして、病人の作った物だから食べたくないのかとまで言い出す始末だ。おばさんの生活の張り合いのようなので、ありがたくその好意を受け入れた。

ひとりて起き上がることが大変になっても、ベッドの上で朝夕のお祈りは欠かさなかった。



結婚式前夜のプージャー（祭祀）。

お見舞いに来た人々のために、娘にお茶の支度をさせ、思いやりに満ちた細かい気遣いを見せた。近所に住む貧しい家庭の様子を気にして、病床でお金を工面してやるような人だった。病人特有のわがままなど垣間見せたこともなかった。常に人のために生きた人生だった。

おばさんが旅立ったのは、インド西部の町にしては珍しく雨が降り続いた肌寒い朝だった。検査で癌とわかってからわずか三カ月。享年四十八才。眠りながら静かに逝ったことがせめてもの救いに思われる。インドでは夫の存命中に亡くなった女性は吉祥女と呼ばれ、それにあやかるために人々が最後の別れに訪れる。ヒンドゥー教徒の葬儀は、アンティム・サンスカル（最後の通過儀礼）と呼ばれる。暑い国のせいか、親族の到着も待たず、できるだけ早く儀

礼を執り行うことが要求される。おぼさんの看病をしていた母親代わりのお姉さんも、葬儀には間に合わなかった。水で清めた後緑色のサリーを着せられ、花輪を巻かれたおぼさんの足元に多くの人々がひれ伏し挨拶をする。枕許では、ヒンドゥー教徒の聖典「バガヴァット・ギーター」がお経のように読みあげられる。サンスクリット語の響きが荘重だ。やっと痛みから解放されたおぼさんは、救急車で公立の焼き場に運ばれた。高いカーストの習慣では、女性も葬列に加わることができないので、男性数名が救急車に同乗しただけだ。最後の儀礼では長男の役割が大切だとされている。本来ならば、長男が親を焼くための薪木に火を点ける。それによって初めてこの世の生を全うしたことになるのだ。そのため、女性は男の子を生むことを昔

から期待され続けてきた。都会では、遺体は川のはとりのガードではなく、電気の焼き場で燃やされる。翌日近親者が遺灰を壺に入れ、家に持ち帰る。遺灰は数日間家の中に置かれた後、近くの川に流される。葬儀はあまりにあっけなく、あまりに簡素だった。葬儀自体にかかった費用は、日本円にして千円未満と記憶している。葬式当日は列席者には何も振る舞わないが、十三日目に盛大な施しの会食をする。位牌や仏壇にあたるものはなく、引き伸ばされたおぼさんの写真にシンプルな花輪がかけられているだけだ。おぼさんを偲ぶすがが少ない分、人の心の中に彼女の記憶がより鮮明に残るのだろうか。少なくとも私には、彼女の生き方と死に方が語りかけるものが、日々大きくなって行くのが感じられる。

死生観というものは各宗教、民族で大きく異なるが、ヒンドゥー教徒ほど死と生を同時に受け止めている民族はいいのではないかと思われる。彼らにとって死はもちろん最大の穢とされてはいるが、根本的に避けられないものである。



女神に祈りを捧げる芸人。

ることを理解すると同時に、次なる再生の大前提として楽観視できるのではないだろうか。仮にこの世で苦しんでも、来世のために功德を積んで準備したので次の生に期待しようといった感じだろうか。少なくともインドでは、現代の日本のように人々は死から不自然に隔離されていない。家で近い人が死に、生あるものが物化する不思議を目の当りにすることによって、生きることの神秘、生あることのありがたさを肌で感じていくのだろう。インドのあるがままのすべてを受け入れる姿勢が、すべての基本にあるともいえる。懐深いインドで精神的にくつろいで、人は生をも死をも含めた自分自身と対峙することができるのだ。

高齢者福祉が変わる

新しいパラダイムを目指して

住吉 俊彦

「住み慣れた家で最後まで暮らしたい」

そう考えるお年寄りは少なくない。が、その当然の願いもこれまではほとんど不可能だった。なにしろ、在宅で生活するための公的な支援体制が不備なために、介護の負担が全面的に

家族に向けられ、結局は老人病院か特別養護老人ホームなどの社会福祉施設に送り込むのを余儀なくされていたからだ。

つまり、老人病院や特別養護老人ホームは「現代の姥捨山」と化していたのである。

ところが、そうした肌寒くなるような日本の高齢者福祉も、最近は大きな変化の兆しを見せている。老人福祉法等福祉関係八法が平成二年に改正され、福祉のあり方が「施設入所型」から在宅福祉を軸にした「地域福祉」へと転換したのだ。しかも福祉サービスを提供する主体が、国および都道府県から、住民により近い市区町村へと移された。

その後も高齢者福祉に関する変革の胎動はつづく。たとえば、平成三年、老人保健法が改正され、在宅医療を側面から支援する訪問看護制度が創設された。平成六年四月には、少子・高齢社会に対応した福祉システムの確立を企図した「二十一世紀福祉ビジョン」が策定された。このなかには、①新ゴールドプランの策定（平成元年に策定されたゴールドプランの大幅見直

し）、②二十一世紀に向けた安心できる介護システムの構築、③介護マンパワーの養成、④介護休業制度の導入促進、などが盛り込まれている。そしてこの福祉ビジョンを受ける格好で、平成七年度から「新ゴールドプラン」が開始される運びとなった。

こうした変革の様相を見ると、現在は、二十一世紀に向けた新しい社会福祉のパラダイム（規範）を創造するための過渡期にあるといえそうだが、さて、これからの高齢者福祉はいかにあるべきか——高齢者福祉施設のあらたな動向も交えながら検証したい。

地域福祉のいない手・ 高齢者福祉施設

日本の高齢者福祉のあり方は、在宅福祉を軸

にした地域福祉へと転換した。これによって「住み慣れた家で暮らす」ことがほぼ可能となった。その地域福祉をになうのが、高齢者福祉施設である。

老人福祉法によると、高齢者福祉施設は、特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、軽費老人ホーム、老人デイサービスセンター、老人短期入所施設、老人福祉センターの六施設と規定されている。これら施設には措置費と称する助成金が国や自治体から拠出される。

この六つの施設のうち、地域福祉の拠点として注目を集めているのが、老人デイサービスセンターと老人短期入所施設だ。前者は当該事業を主体に独立施設として運営している例が結構

あるが、後者は、特別養護老人ホームの付帯事業として運営しているところが多い。特別養護老人ホームというのは、居宅で適切な介護が受けられない高齢障害者のいわば「終の住処（すみか）」的な施設として知られているが、今日では在宅福祉を支える主役として欠かせない施設となっているのだ。

ところで、こうした高齢者福祉施設の経営主体は、老人福祉法で、国、地方公共団体、社会福祉法人と定められている。社会福祉法人は、社会福祉事業法の定めるところにより設立された法人で、その数は年々増加している。ちなみに総務庁行政監察局が調べた社会福祉法人は、総数一万三四二三法人（平成三年三月末現在）。

その経営する社会福祉施設は、一万七二〇二施設（社会福祉施設全体の三三・五％）となっている。

この社会福祉法人の設立母体は、これまで医療・福祉・宗教関係が主流を占めていた。「福祉教団」として有名な浄土宗の社会福祉事業所屬施設のなかにも、知的障害者施設や養護施設と並んで特別養護老人ホームや養護老人ホームが数多く営まれている。が、最近、地域福祉の新しいにない手として登場してきたのが、生協、農協、YMCAなどの地域密着型の巨大組織である。

施設運営に乗り出す 巨大組織

生協はもともと地域福祉に関連したボラン

ティア活動（組合員を対象とした「くらしの助け合い」や「ふれあい食事会」等）を展開してきた。それが平成五年暮、生協が関与する福祉事業（老人保健施設、訪問看護事業、デイサービス事業、在宅介護支援事業）に対して組合員以外にも利用の途が開かれた。しかも市区町村からの委託事業としての認可も得られるようになった。これによって生協は施設の建設・運営へと手を広げはじめた。

生協のなかで施設運営に取り組んでいるのが、生活クラブ生協・神奈川（組合員約五万人）だ。すでに直営のデイサービス事業を川崎市麻生区、同市幸区戸手、葉山町の三か所で運営している。小田急線新百合ヶ丘駅から車で約五分。川崎市麻生区東百合ヶ丘の住宅街の一角にある「生活リハビリクラブ・麻生」をのぞいてみた。

入口のドアをあけた途端、床板に重たい物を投げ落とすドスンという鈍い音と、「わあっ」という大歓声が耳を衝いた。何事かと屋内に眼をやると、車いすや杖にすがったお年寄りが十数人、中央に集まって何かのゲームに熱中していた。専従職員の金田由美子さんが「空罐ボウリング」と言う。ここでの狙いは残された機能をより使えるようにして、普通の生活につなげてゆくことなんです。そのために、ゲームを通してからだを動かすへ遊びテーションにも力を入れて」と教えてくれた。

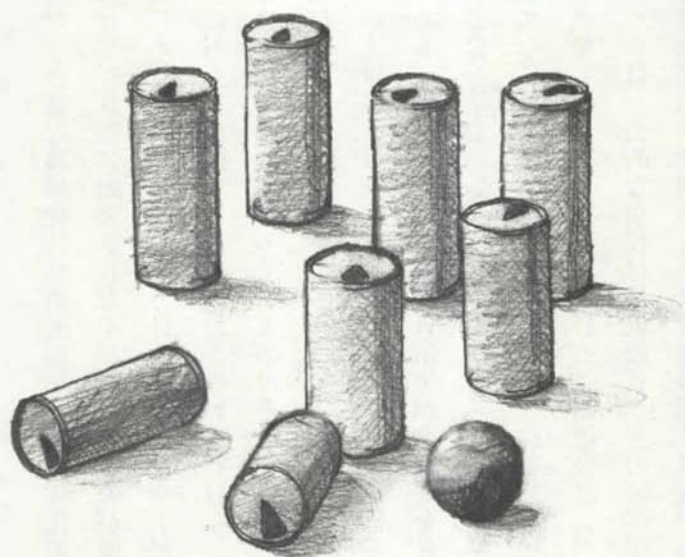
あらためて七〇坪ほどの広い室内に眼をやる。床の一隅に赤や黄などの色とりどりの紙を貼った空罐が一〇個、ボウリングのピンに見立

てて並べている。若い職員に名前を呼ばれたお年寄りが、ちいさな鉄の玉を投げる。笑顔と歓声が部屋いっぱいにはじけた。

帰り際、車いすの八二歳のお年寄りが「ここに通うのが楽しみなんですよ。週に二回しか通えないのが残念ですね」と語った。

生活クラブ生協・神奈川は神奈川県藤沢市に特別養護老人ホームも建設した。同施設はデイサービス、ショートステイのほか、ホームヘルパー派遣事業も手がける計画だ。また全国最大の生協・コープこうべ（組合員約一〇八万人）も、特別養護老人ホームの建設に乗り出した（平成七年四月開設予定）。

農協の福祉事業はどうか。現在、社会福祉法



人による特別養護老人ホームが全国で九か所運営されており、これら施設にはデイサービスセンターや在宅介護支援センターなどが併設されている。またケアハウス（軽費老人ホームの新しいタイプ）も社会福祉法人により二か所、さらに病院を経営するJA厚生連運営の老人保健施設が全国に六か所ある。

YMCAも施設の運営に意欲的だ。すでに「とちぎYMCA」と「広島YMCA」が特別養護老人ホームを建設・運営する。

福祉事業に 民間活力導入の動き

ところで、在宅・地域での福祉サービスをだれが提供するかというのは大きな問題だ。かつては家族や親族がその主役の位置に置かれてい

たが、急速な高齢化社会の進展や、核家族化の進行で、負担に耐えきれなくなっているのが現状である。当然、国や地方自治体が福祉サービスに対して公的な責任を果たさないといけないわけだが、問題となっているのはその負担の割合だ。

いま世界にはモデルとなる福祉システムは三つある。一つは、国や地方自治体が全責任を負う「スウェーデン型」。二つめは、ドイツやイギリスなどヨーロッパの国に多く見られる公と私が生連帯して福祉を担う「EU（欧州連合）」型。三つめは、公的な責任は最低限負うものの、主体は民間の非営利あるいは営利の団体組織が担う「アメリカ」型。

日本の現状は社会福祉法人などの専門団体に委ねている点などからして、形式上はEU型に近い。が、最近の厚生省の動向を見ると公的責任を強化するよりも、むしろ民間活力を導入することによって、福祉サービスの充実を図ろうとする思惑が目立つ。

現在、福祉施設の設置については、営利目的の複雑な経営を防ぎ、利用者を保護するためにきびしい基準が義務づけられている。このため施設の運営主体は、先にも述べたように、国や地方公共団体、社会福祉法人に限られ、施設の設置や人員配置も基準の枠がはめられている。ところが厚生省は、こうしたサービス体制のもとでは福祉が硬直化し、整備・充実は覚つかな

いとして、特別養護老人ホームや老人保健施設など福祉施設の経営に民間企業の参入を認める意向を明らかにした。

民間活力の導入にあたっては、施設水準を維持するためにあらたな評価基準を設け、これを満たす優良施設には「シルバーマーク」を交付し、さらには従来こうした事業を行なってきた社会福祉法人なみの税制優遇策を講じ、補助金も交付する方針だという。競争原理を働かせ、高齢者福祉事業の質的・量的な拡大を図ろうというのが厚生省の狙いだ。

最近の福祉施策は、応能負担の原則が色濃く出てきている。サービスを受けようとすれば、経済的な能力に応じて負担すべきだというのがだ。民間資本が導入されれば、この考え方はさらに強化されるだろう。

確かに介護に関する福祉問題は、かつてのようには社会的な弱者や経済的困窮者だけを対象とするわけにいかなくなっている。だれもが介護サービスの世話になるかもしれない時代となっているからだ。しかし福祉が一般対象化し、応能負担の原則が強まるにつれ、現在も厳然として存在する社会的弱者や経済的困窮者が阻害される。二一世紀を前にして再び福祉の差別化という社会的な仕組みが構築されようとしているのだ。

世界に例を見ない高齢化速度の真つただなかにある日本が、日本らしい「福祉国家」を構築するためにも、日本の福祉システムはどうあるべきかを市民ひとりひとりが真剣に考えなければいけないときがきたのである。

(フリージャーナリスト)

南伊豆の海と山

(最終回)

文と写真Ⅱ 夏 攸吾

自然を畏れる、とていつい

この取材への旅立ちが奇しくも一月
一七日朝、兵庫県南部地震という大災
害の発生、刻々のニュースをカーラジ
オで聴きつつとなった。

これまで、もっぱら首都圏に懸念さ
れていた都市直下型大地震。ハンドル
を握りながら、かつて大阪に永く住ん

でいたことのある友が、「関西のほうに
は地震の心配がないから」といつてい
たのを想いだし、これはえらい被害に
なりそうだと感じていた……。

だが、この陸つづきのさきに鉄道や
道路の大断裂が生じているなど、まる
で嘘のような、ポカポカのどかな道中
に、妙にちぐはぐな気分でもあった。

途中、小田原で馴染の蒲鉾店に寄り、



南伊豆国民休暇村のある
弓が浜

「起こるとすりや、こっちだとばかり……」、驚き呆れる主人の顔にうなずきかえして伊豆東海岸を南伊豆へと走る。

伊豆半島はご承知のとおり名だたる地震の巣、ひとたび大打撃に見舞われれば陸の孤島と化し脱出は船によるしかない事態も覚悟しなければならない。

車で取材することが多い私は^{あたし}心得として、野営とサバイバルの一式いつでも用意して行く。ところが、日ごろほとんど水で苦勞することがないせいか、よくポリタンに水を入れ忘れるのだ。どうも心^{こころ}かけが甘くていけない。

そこで想う、このたびの阪神大震災。その後の報道で知らされた、まさしく戦災に匹敵する被害甚大、にもかかわ

らず歯^はがゆいばかりの救援の実情を見るにつけ、非常事態の認識^{しんしき}がまったくない国や自治体の甘さ、目にあまる。

それにくらべれば民人の、た^たがい協力しあつて耐えぬこうとする姿は感動的ですらあるのだけれど……。どんなにこっぴどくやられたって、優秀な経済力と技術力ですぐに復興できると信じて疑わないふうの、平和・繁栄ボケはやっぱりちよつと怖い。

日ごろの付き合い、助け合い、自分の命は自分で守る心^{こころ}がまえ……大災害から得られる教訓はいろいろあろうけれど、なによりもまずたいせつなのは、自然を甘く見る思い^{おもひ}上^うがりを捨てさることではないか。人智・人為をはるか

伊勢海老漁の刺網を繕ろう



に超える自然の脅威、しかも人を生かし、人が生きるために必要なさまざまの命をも生かしてくれる、母なる自然の懐の深さを、あらためて思い知る必要がある。

この連載は私、気晴らしの読物でしかもなにかしら心にのこるものをと、つとめて書いてきたつもりだ。力およばずながらも、さまざまに生きる人のこと、人があつての土地のこと、そして生きる魂に積極的に関与してこそその宗教のこと……など。

事情あつて今回で終えるにあたって、一言つけくわえておきたい。この大災害後、主に医療とやらんで切望されたメンタルケアの分野で、少なくとも

も本稿執筆時点では、私の耳目にふれるかぎり、宗教関係組織の目だった救援活動のなかったことが、哀しい。

……さて、そろそろ本題にもどろう。

私がこのたび南伊豆にきたのも、もちろん逢いたい人があつたからだ。

下田。黒船来航から「日本の夜明け」まで、激動の歴史ドラマの舞台となつた港町。その港からでる遊覧船に乗れば、水仙の爪木崎^{つめきざき}、須崎^{すざき}、吉佐美^{よさみ}、田牛^{とうじ}から、お隣り南伊豆町の弓が浜^{いろうざき}、石廊崎^{いろうざき}にかけて、磯と白砂の浜とが連続して複雑に入り組む海岸線と、沖合に伊豆七島の島影ならべて美しい、恵みの海を目にやきつけることができる。

私が逢いたい人は、田牛の浜にいた。



伊勢海老も形が小さくなった

渡辺さんは三〇代なかば、大学をでて、サラリーマンを経験してから、家業の漁師を継いで七年目になる。私が知りたいと想っていた、もともと海にやさしい釣り漁の漁師。

現地に着いた晩、さっそくに訪ねておもしろい話をたっぷり聞いた。その詳細をここに紹介できないのがざんねんだ。

彼らが主に狙う魚種は、春のカツオ、夏のスルメイカと突きん棒カジキ、秋から冬にかけてのヤリイカ、冬から春にかけてのキンメダイ。なかでも石廊崎近海の夏イカの旨さは抜群だし、痛快なことでは突きん棒カジキ漁に勝るものなしたそうだが、どちらもいまは

時はずれ。また、漁師の腕の見せどころという、キンメ漁にもちと早い。それでも、明日は漁期もおわり間近のスルメイカ漁にでるといふ。私は一も二もなく同乗を願いでた。

このあたりのイカ漁は漁火^{いかりび}皓皓と灯しての夜漁ではないので、出漁は夜明け前。

「じゃ四時半ころに」、約束をして別れた。

環境が人を創る

私が宿にした弓が浜の南伊豆国民休暇村は、ウィークデーというのに満室。浮かれバブルの時期にさんざん経験を積み、賢く旅なれてきた客の、お高い宿

下田市田牛のイカ漁



ばなれの傾向がいま顕著だ。なっとくできる料金で、設備・サービスの向上をはかる宿に人気が集まる。

翌朝は三時に起き、準備おこたりない身支度、しつかりととのえてでかけた。迂闊にも忘れた弁当は渡辺さんのお宅で用意してくださり、いまでも元気に現役の海女さん、お母さん手作りの饅頭までいただく。奥さんが「船はだいじょうぶですか」、笑顔で心配してくれるのもありがたかった。

月あかりの港。僚船がみな釣り漁主体の船で、つまり根こそぎ資源乱獲の旋網船まきあみがないせいか、略奪臭のしないのがいい。このあたりで網漁といえ、伊勢海老の刺網くらい。私にはかつて

南伊豆町下流したるの海で、その伊勢海老漁船に同乗した経験もあった。

船首に突きん棒カジキ漁の立ち台いさましい渡辺さんの船、富美丸は、カーナビに相当するプロッターなど最新装備の一七噸。港をでると全速で寒風を裂き、黒い波を蹴たて、大島近海めざしてまっしぐらだ。

漁場に着くまでの約一時間、私は危うく船酔いになりかけたが、弁当と熱いお茶のおかげでなんとか、醜態をさらさずにすんだ。

やがて、伊豆七島の島影くつきりと浮かびあがらせて陽が上る。私などともに立っていることさえ至難な揺れる船上で、漁師の動きは俊敏でムダが



伊豆大島沖に群がる
イカ釣り船

ない。魚探で見えない海中に魚影をもとめ、釣り糸を垂らす。手でしゃくつて魚信あたりを探り、巻き上げる。私はその表情のわずかな変化にじっと期待をこめる。

「きたようだね」、渡辺さんの表情が一瞬ゆるむと、まもなく勢いよく水を吹いてヤリイカが揚がってくる。マイカ（スルメイカ）もまじるが、スマートで透きとおるような魚体の美しさはスルメイカにおよばず、魚価もちがう。海水を汲み上げたバケツに入れられても、元気なジェット噴射やすみなくツンツン耳を突き上げ、仲間がふえると冷水槽に放り込まれていった。

魚信がかんばしくなければ、次々に

ポイントを移動しての漁。しかしこの日はついに、おもしろいようにイカがつく（掛かる）ようなことはなかった。潮の具合はまあまあだそうだが、「きょうは、どうもよくないね」という。ときどき僚船から無線で入る濁声だみも、「やつとおかずになるぐれえのもんだなあ」と嘆き節。利島としま近くの漁場にいるキンメ漁船の釣果も、おもわしくないらしかった。

漁をはじめてから約五時間、一一時半ころには切り上げて、午後一時からはじまる入札に間に合うように帰港。

結果この日の水揚げは、「ガソリン代に小遣いがちよつとくらい」の、約二〇キロ。彼はそのなから、私に惜し

「伊豆の味おかだ」
岡田さん夫婦



げもなく分け前をくれる……。

そのイカ持つて私は、郷土割烹「伊豆の味おかだ」に直行だ。主の岡田さんは、二〇年務め上げた下賀茂温泉の老舗旅館の番頭さんから、転じてこの店をはじめて一〇年になる苦勞人。渡辺さんとひきあわせてくれたのも、この人だった。

板前さんが気持ちよくこしらえてくれたスルメイカの刺身は、心地よい疲れをほぐすように、私の舌に喉に軽やかに甘美に、海にやさしい釣り漁の余韻をのこした。

アイディアマンでもある岡田さんはつい最近、曲がり角にきている民宿経営と旅費軽減を望む旅人との橋渡し

伊豆長岡温泉の「華の湯」



に、泊食分離、意欲的な地元温泉民宿と自店とのタイアップによる「南伊豆・宿と味のベストクラブ」という新趣向のシステムをスタートさせた。
「おかげさまで、好感度のすべりだしです」という。

そういえば、このたびここにくる途中、入浴と昼食休憩に寄らせてもらった伊豆長岡温泉の「華の湯」もそうだ。



伊豆オレンジ研究会の
ミカン山

一泊朝食付き、いわゆる「B & B」(ベッド&ブレイクファースト)に加えて、バス(入浴)のみも歓迎という「B キューブ」なる新しいタイプの宿を試みて成功している。これは、永らく老舗の高級旅館「はなぶさ」を仕切ってきた女将、花房さんの、宿にとっても客にとっても負担が重くてムダの多い、これまでの宿泊形態への反省から生まれた。また、一軒の宿がなにかになにまで独り占めしようとすれば、旅館街そのものが寂びれてしまうことにもなる。

このように、成熟してきた旅人を相手に、宿や店の在り方も様変わりしていく。ほんとお愉しみはこれから

……というわけだ。

翌日は岡田さんに、ジューシーで健康な香気あふれるミカン山に案内してもらおう。氏が有機栽培生産者と協力して発足させた「伊豆オレンジ研究会」の農園には、一〇〇種類にのぼるといふオレンジをはじめ、さまざまな柑橘類が宅配出荷の時を待って、暖かい陽光を浴び、艶やかに輝いていた。

「恵まれてますよね、生かされてますね……それでちよつと、南伊豆の人には勤勉さがたりないんですよ」と、岡田さんは笑った。

◀メモ▶ 伊豆の味おかだ 〇五五八―六二―一〇〇六

南伊豆国民休暇村 〇五五八―六二―〇五三五

華の湯 〇五五九―四七―二〇三〇



松本幸右衛門(二)

関 容子

幸右衛門の大歌舞伎での最初の師匠、八代目中車は、二代目段四郎の三男で、先代猿之助(猿翁)の弟だから、今の猿之助の大叔父に当たる。大正二年、市川松尾の名で十七歳の遅い初舞台、大正五年、光秀役者と言われた七代目中車の名前養子となり、大正七年に八代目八百蔵を襲いだ。やがて兄猿之助と共に二代目左団次の一座に入り、兄弟は岡本綺堂や真山青果の新歌舞伎

にいろんな役をつとめたせいか、芸風に新味があった。昭和二十八年六月歌舞伎座「太功記」の光秀で、八代目中車を襲名。その襲名披露の配り物の扇子には、兄猿之助が書いた「今日は又 雲一つなき 牡丹かな」の句があり、私の母が客席で太功記の開演前、ヒラヒラと自慢げにその扇子を使っていたのを思い出す。あのころの中車は、浅黒くて精悍な顔つきに白くてよ

く揃った歯並びが目立ち、何となく怖い感じがした。幸右衛門が笑って言う。

「ええ、中車の旦那はとっつきは怖かったですよ。話の途中で、あの目をカッと見開いてこっちを見るでしょう。何だか睨まれてるみたいでしたが、別にそうじゃあないんです。よくつきあうととても思いやりのある方で、とにかく小所帯でしたから弟子としては居心地がよかったです。旦那に教わった芸の心がけて最初になるほどと思ったことは、たとえ通行人の役でも、その場に初めて出て来た人間か、それとも年中往き来している人間か、ということを考えてから歩きなよ、ということでした」

幸右衛門は、「今ならもういいでしょうかね」と断わって、師匠がどんなに女の人たちに優しくかったかについて話し始める。ちよつと回りを

気にしたり、急に調子を落したりするところが、亡き師匠の女癖について語る弟子という役どころの性根にぴったりだ。

「旦那は女の人が好きでしたね。定評がありました。巡業に行くと誰かしら女の人と一緒になんです。ラジオに出てた関係でそういう畑の人もいましたし、まったくの堅気さんもありました。旅に出るとわれわれ弟子が師匠の荷物を持つんですがだんだん荷物が増えますでしょ。もらい物をしたり、買物をしたりなさるから。あの時分宅急便なんでもものはありませんからね、みんな弟子が持たされる。リュック背負って両手に大荷物持って、もうそれ以上は持たせられないと見ると、旦那はいつも小さな鞆一つで身軽に行くんですが、女の人荷物を持ってやるんです(笑)。それくらいなら自分のを何か一つ持つ

てくれれば助かるんですが、そうはいきません
でしたねえ」

中車の本妻さんは葭町から出ていた粹筋の人
で九十歳前後で今も健在。巡業に誘う女の人以
外の、本妻さんも「公認していた」という恋人は
舞踊家で、この方も八十歳前後でやはり健在。

「女の方はお丈夫ですねえ。皆さんお強い(笑)。
で、旦那の御本宅は四谷の大京町にあって、綾
さん(というんです、その女の方は)のおうち
は信濃町にあって、どちらもマンションですが、
旦那はほとんど信濃町へお帰りでした。旦那が
亡くなったのは昭和四十六年の六月なんです
が、その日は綾さんが九州のお弟子のおさらい
会においでになる、というので、二十日は大京
町に帰るよ、と前々から言われていました。そ
れで当日、どうも何だか旦那がつかうそうなん

です。国立劇場で、松緑さんの『髪結新三』に大
家さんが出ていて、それが大変いいという評判
で旦那も毎日張り切っていたんですけどね。そ
れでその日。舞台をすましてハーハーしながら
楽屋へ引き揚げてくると、髪取って衣裳をぬい
で、しばらく鏡台前に引っくり返っていました。

『おい、中之助(そのころのあたしの名です)、
化粧を落してくれよ』って。もう化粧を落す気力
もなかったんですね。それであたしが拭き始め
ると、小鼻に張りがなくなっているというのか、
小鼻を押すと力なくグニャッとしてしまっ
て、これは何だかおかしいなア……と思いまし
たが、まさかその晩亡くなるとは思ってもみま
せんでした。それで車と一緒に乗って御本宅へ
お送りして、奥さんに、じゃお願い致します、
おやすみなさい。すると師匠が、あ、御苦労さ



「釣女」で大名を演じる幸右衛門。

まって。これが最後に耳にした師匠の声でした」

翌日、国立劇場の弟子のところへ本妻さんから電話があったのは、昼の部序幕の「吃又」の百姓をつとめて幸右衛門の中之助が引っこんできたところだった。

「旦那の様子がおかしいからすぐに来てみてくれなにか、つておっしゃるんです。旦那とは久しく一緒にいらっしやらなかったから何かあったのか、なんて思いながら、今は幸次郎になって

いるそのころの中次郎と一緒に行って、部屋へ通されるなり、旦那旦那、つて呼んでみたけど何もおっしゃらない。すると後ろから『もう亡くなってるよ』つて、奥さんが……」

二人の弟子はすぐ国立劇場へ引き返し、師匠が亡くなったことはまだ楽屋内に伏せてもらいたいと制作部に事情を話し取り急ぎ代役の手配をしてもらう。大家の代役は権十郎と決まった。

「代りが決まると、われわれはその方の用事をしなくちやなりません。ここはこうしてくださーい、といろいろ段取りを説明したり、持って出る物を揃えたり。で、御本宅のほうへは旦那の弟さんの小太夫さんに連絡して行っていたきました。芝居を終えてすぐ大京町へ伺うと、夜になって白鷺旦那もいらっしやつて、その日は明治座に出ていた兄弟子の中蔵と、あたしと、中

次郎の三人に声をかけてくださった。『君たち、心配しないでいいんだよ、おれが面倒みるからな』って。三人ともほっとしました』

白鸚（八代目幸四郎）が松竹から東宝へ移籍したのは昭和三十六年のことだが、このとき中車も行動を共にし、東宝劇団の副將的存在と言われた。中車は東宝に十年在籍のままで亡くなったことになる。病名は肺血腫。七十五歳だった。

中車が東宝に移る前、晩年の初代吉右衛門の佐倉宗吾で、渡し守甚兵衛を好演したことは当時評判だったという。

ところで白鸚は、中車が亡くなった翌年に松竹に復帰したが、中車の三人の弟子たちは、白鸚の預り弟子という形でまだ東宝に残っていた。

「すると白鸚旦那が番頭さんを通じて、みんなもこっち（松竹）へ戻らないか、とおっしゃっ

てくれて。すると兄弟子の中蔵が、松竹さんならこれから年を取って多少体がきかなくなっても、たとえ通り流し（通行人）でも面倒をみてくれるんじゃないか、と言うんで、戻らせていただきました。中車の旦那が亡くなって二年後の昭和四十八年のことです。帰って初めて歌舞伎座に出たのが、十月の七代目菊五郎襲名興行、『対面』の大名でした』

三人の弟子たちは松竹に戻ってもまだ市川姓で、屋号も中車の立花屋のままでした。

そして昭和五十六年十月、十一月、高麗屋三代襲名が行われる。八代目幸四郎が初代白鸚となり、六代目染五郎が九代目幸四郎を襲ぎ、その長男金太郎が七代目染五郎になった。

「そのとき白鸚旦那から、君たちもこれから松本を名乗って、高麗屋の一員として九代目（幸四



「双面道成寺」で大館左馬五郎を演じる幸右衛門。

郎)を盛り立ててもらいたい、というふうなお言葉がありまして、それで中蔵は幸蔵に、中次郎は幸次郎に、あたしは中之助を幸之助に……でももう幸之助さんがいるから、幸右衛門ではどうだ?とおっしゃるので、はい、結構でございます、と有難くお受けしました。白鷺旦那は口数が少くて威厳がありましたからね。東宝時代の『明治大帝』がびったりの方でした。あのときはあたしは側近の役でした。舞台上靴をはいて出るのは初めてで、何だか気持ちが悪かったですねえ」

白鷺は三代襲名をすませ、翌年一月にはもう亡くなってしまふのだった。襲名興行を終えると弟子たちをお宅に招き、それぞれの労をねぎらって一緒に記念写真を撮った。膝掛けをしてゆったり椅子にかけた姿は、にこやかながらとても威厳に満ちていた。

さて、幸右衛門は話し終えると、今日はこれから踊りの出稽古に行くという。聞けば、中車が恋人の綾さんのために立花流という踊りの流派を創流し、二代目家元を綾さんに渡して行った。幸右衛門はその二代目家元立花紫扇の弟子で中扇という。この名は師匠の中車が亡くなる前に考えておいてくれたもの。

「おかげで踊りのお弟子を持つことができました。中車の旦那はいい恋人を持ってくれました」

(コラムニスト)

日本の特産

「マス・エリート」

倉田 保雄

もうひと昔前のことだが、英国のザ・タイムズ紙が世界の代表的な新聞を紹介するシリーズを掲載した。

日本は朝日新聞が選ばれたが、紹介の中に、「この新聞はマス・エリートが読む新聞である」と書いてあったのが印象的で、いまでも記憶にはつきり残っている。

「マス・エリート」(MASS・EL

ITE)とは何か。そのまま日本語に訳せば、「大衆エリート」だが、大衆とエリートとは相反する存在であり、何のことかさっぱり分らない。要するに大衆も読むし、エリートも読むという表現のために作った造語だったのだが、当時の英国ではタイムズのような高級紙はエリート、つまり上流インテリ層の新聞で、デー

リー・メール、デーリー・ミラーのような大衆紙との間には大きなギャップがあったから、硬軟両様の編集で七百万（当時）近くの発行部数を持つ新聞が存在すること自体、英国人には不可解だったに違いない。

しかし、よく考えてみれば、タイムズに云われるまでもなく、いまの日本社会はマス・エリート这个社会なのだ。階級区分のはっきりしている英国およびフランスに通算十年住んだ体験から日本社会を見ると、異常に徹底した平等性におどろかざるを得ない。

何が異常かというと、日本人みんなが同じでありたいという願望を抱いて、九〇パーセントが自分を中流だとみなしていることで、これは英国、フランスに限らず少くともヨーロッパでは考えられないことである。だから、日本はよくないなどと云うつもりはないが、云いたいことは、このような日本人の平等理念はヨーロッパはもちろん、アジアでも通用しないという点だ。

早い話しが、マスとエリートの区分がはっきりしていて、ミックスしないからだが、日本ではたしかにそうした区分がなくなってしまってい

るように思えてならない。

大学教育が普及しているのは結構だが、本来、エリート養成の場であるべき大学が軒並みレジャーランドと化し、ヨーロッパの大学生なみに勉強する日本の大学生はいまや例外的存在だ。これは私自身が有名K大学で十二年間に亘る講師を勤めた体験から云えることで何とも情けない実態だが、マスコミはそんな粗雑な大学生および大学卒業生を一樣にエリートとよんでいる。

何のことはない、彼らはマスプロ大学でマスプロされたエリートであり、その意味合いでマス・エリート

という言葉がぴたり当てはまるではないか。タイムズはそこまで掘り下げて監察はしていなかったが、この手のマス・エリートは掃いて捨るほど日本全国にいると思う。

マス・エリートの特徴はまず第一に日本語を理路整然と話せない。したがって、西洋式のディベートはできないので、英語は話せても、インテレクチュアルな会話やディベートには参加できないケースが多い。

現代史を学校で教っていないし、自分からもとくに学ぼうとしないので、自分の国の在るべき姿など哲学思考に欠けており、同年代の外国の

エリートとの知的ギャップは大きいのだが、マス・エリートはほとんどがそれに気づいていない。

大学教授ともなればマス・エリートといえどもそれなりの教養は身につけているはずだが、テレビのクイズ番組などにいそいそとゲスト出演し、いざ回答を書く段になると漢字が書けず「ひらがな」で書いて平然としている。しかも、隣りに坐っているタレントの女の子が漢字で書いていてもだ。これは、外国の場合なら、簡単な言葉のスペリングを間違えるのと同じで、エリートの資格がない、世間の笑いものになるのが関

の山であるが、日本では逆に人気が出るというのだから何をか云わんやである。

有名大学教授がテレビのCMに出て、お笑いタレントなみの藝をしているのも情けないが、そうしたCM出演でその教授の学生の間で人気を博し、教室が学生であふれてしまうというのはもつと情けない。

また大学にも問題がある。日本語がよくしゃべれない外国人タレント歌手を国立大学が講師に招いて、「客寄せ」をやるというのもエリートの本場ヨーロッパでは考えられないことだ。タレント歌手だけではない。



落語家も大学講師になれるし、それをマスコミが取り上げて持ち上げると、落語家はその気になって、自分がほんとのエリートになったと勘違いし、こんどはテレビに出演して教育論を談じたりする。すると、視聴率

が上るのだ。

まあ、視聴者の大部分がマス・エリートだから不思議ではないが、要するに、これが日本の大学の実態なのだ。

ことわっておくが、日本の大学生

全部が全部、マス・エリートではない。私の体験では真のエリートもいるにはいる。しかし、残念ながら、それはひと握りの存在で、大学は彼らの存在に特別な関心を示そうとはしない。

大体において、大学生が教室で幼稚園、小学校なみに授業中に私語をするという大学は世界広しといえども、日本の大学ぐらいいなものだろう。私は講義中に私語をした学生はどなって退席させるか、必要に応じてつまみ出し、教室への出入りを禁止した。それでも入ってくる奴は顔を覚えておいて、教務課で顔写真と照

合し、落第点Dをつけるといった風に厳しく対処した。

その結果、出席してくる学生はよく勉強し、私も熱を入れて教育、指導に当った。つまり、マス・プロ化した大学でも、やり方次第でマスとエリートを分けてしまえば、マスには単位をやるから出てくる必要なしと伝え、出てくる学生を真のエリートに仕立てることは可能であると私は確信する。重要なことは、教える自分が自信と威厳を持って接することであり、CM的人気などは問題外——ということだ。

(評論家)

教育の現場から

子どもものの心の揺れを受け止められる

親・教師・大人になりたい

緘黙の子への
アプローチにそって

ゆうび小さな学園 代表
大妻女子大学大学院非常勤講師

内堀 照夫

一、自己表出できる環境を求めて

「先生、私の長女麻子は、緘黙症かんもくしょうなんです。

家では普通に喋り意思表示が出来ますが、学校へいくとまったく喋りません。それで学校適応もままなりません。こんな子でも治るものでしょうか。」

と、父親は本園を訪れた。

麻子は、就学通知表によって地域の公立小学校に入学した。入学して二、三カ月は取り立てて問題にするほどのこともなく過ぎていった。担任教師の呼び掛けにも「はい」と返事が出来る。ところがそれから以後は、日毎に登校を渋るようになってきた。

母親が理由を尋ねてもはつきりしない。母親

は、我が儘を許しておく訳にはいかないと、引張っては学校に連れていった。しかし、三十分もしないうちに家に逃げ帰ってしまう。母親は、泣き叫ぶ麻子を抱えるようにして、また学校まで連れていく。麻子はそれでも懲りずに、また家に帰ってきてしまう。こんなことを数回も繰り返す日が三ヶ月も続いたという。

それまで、教師の問いかけには「はい」と言っ
て応えていた麻子がまったく学校では口を閉ざしてしまった。朝の当校準備に長い時間がかかるようになり、顔色も青白くなってきて、母親として、当校を強制することが可愛そうになり、学校・教師から登校させるよう要請があつても無理をしないままに二年が過ぎた。

その頃叔母が、「麻子によさそうな、規模の小さい私立の学校がある」と、S学校を紹介して

きたので、両親は渡りに舟と転校させた。麻子が三年生になった春である。

S学校でも、麻子は、転校して二、三ヶ月はよかったが、それ以後は地域の公立小学校へ行っていたときと、同じパターンで、登校をしづるようになっていった。そしてまた二年が過ぎる。

麻子が五年生に進んだ一学期、本園について新聞報道で知り、父親が相談に訪れたのだった。

「緘黙Ⅱ場面緘黙」とは、特定の場面で言葉を発しない、あるいは言葉を発することが出来ない状態のことである。従って心因性の症状とみるのが一般的である。「場面緘黙」がどのような原因でおきるのかは、いまだに明確にされていないが、研究者の多くは次の諸点を指摘する。

- 1、体質的に何等かの特性があるのではないか。
- 2、知的な発達が遅るやかではないか。

3、初期における対象関係の成立過程に何等かの障害があったのではないか。

4、社会的集団的経験が発達過程で不足していないか。

5、何等かの心理的外傷体験をもっているのではないか。

ここで注目したいのは後の三つは、いずれも「人間関係」の在り方に関わっていることである。

父親の訴えは続く、

「S学校は、少人数制で、人間関係も温かく、麻子には過ぎしやすい面もたくさんありました。が、やはり私立なんですわ。学力とか、進学とかに熱心な保護者が多いんです。成績に目が向き始めると、人間関係も粗雑になってきます。その上、麻子は学力も遅れていましたから……。また、登校を渋るようになってきました。いえ、

その頃は、むりやり登校させれば行っただんですが、だんだんと顔色が青白くなり、ただでさえ表情が乏しい子なのに、まるで能面のようになっていました。学校に行きたくないとはなかなか言いません。しかし、朝の身支度がスローになったり、できなくなったり、で、これは登校したくないんだな、と分かります。それじゃ休みなさい。となって……」今日に至ったと言う。

二、学校を親と子で選んだが……

初めて麻子と出会ったとき、ほんの少し握手をする手の温もりを氣遣っただけで

「よく来たね。内堀です」と、

麻子の瞳を見ながら、力が加えられないその手を、こちらこそと握った。共感的関心を抱い



「縄跳び」——お嬢さん、おはいんなさい。ありがとう。

た出会いは、まずまなざし一つから人間同士としての温もりが伝わるのだろう。この人は、「私のことを思ってくれている」と心底信じられる関係を成立させるのは、日々のほんの微かな見落としてしまいそうな「快い優しさ」の積み上げによるもの

のようである。

二回目の相談で、両親と長時間にわたって、協議した結果「公立小学校で、規模の小さい学校が麻子に

合うかもしれないとの結論に達した。幸いなことに、過疎が進んでいる地域では、児童数が全校で百名程度、一学年一クラスの学校が増えつつある。麻子をそのような小規模なT小学校に転校させることにした。

しかも、これまでの轍を踏まないために、週三日は登校し、後の三日は、本園に当園して「自立」を促しながら充分な時間をかけて学校を好きにしていこうとの方針を立てた。

わが子の胸の内を想うと、じっとしておれない両親は、わずか二日の間にT小学校に転校を手續を完了した。

ところが、両親から転入の理由と、しばらくの間の方針を聞いたT小学校では、「私たちは教育のプロである。学校に通わせてくれさえすれば、必ず元気ないい子にしてみせる。毎日通わ

せなさい」と強く要請してきた。

やむなくその要請に従って麻子を当校させていたが、二週目頃から登校を嫌がるようになってしまった。これまでの二校とまったく同じ状態である。

三、子どもの言動を共感的に受容して

三週目のある日、T小学校から電話が入った。

「麻子が二時間目の途中からいなくなってしまうた。もし学園に行くようなことがあったら連絡してほしい」と。「家に帰ったな」と思いながら胸を痛めた。

翌日、当園してきた麻子に、その時の状況と無断下校を執行するまでの気持ちを、並んで椅子に掛けガムを噛みながら聞く。これが緘黙の子かと思えるほどによく話す。

「話を聴く」ことに共感的な関心をもち、全身のエネルギーを傾ければ、少しずつではあるが心を開いてくる。話を言葉だけで聞こうとしても無理である。話し手の表情はもとより、頭の前から足の先までの小さな動きにも、話し手の心が表れている。言語以外の要素にも神経を向け「心の揺れのまるごと受容」に努めていくのである。

「先生方や主事さん方にご心配をかけたのだから、あまりいいやり方ではなかったね。今度帰りたくなって我慢が出来なくなったら『家に帰ります。心配しないで下さい。麻子』のカードをそっと、先生の机の上か、よく見えるところに置いてくることにしたらどう」と語りかけた。学校教師からはもちろんのこと、両親も「学校から黙って帰る」などという行為は、最も悪

いことであると叱り続けられてきている。それは麻子自身の罪悪感となっている。

「また、叱られるのではないか」と、恐る恐る話してみたら、叱られるどころか、逆に「作戦」まで授けてくれた。これは麻子にとって十才になるまで一度も経験したことのない喜びであり、胸のすくような快感であった。

こんな受け止められ方をした麻子は安堵しそして安定感を持った。安定して鬱積^{うつせき}していた感情をこの人には表出できる、と感じとっていた。

「うん、そうする」と普段の硬い表情からは想像できない微笑みをうかべ声をあげた。早速、B6版を二つ折りにした画用紙を5枚作って、嬉しそうにカバンにしのばせた。

四、優しさと感じとれる接し方を

登園すると、まず始めに学校での生活について話し合うのが慣わしになりつつある。麻子も話すのが楽しみの一つとなった。

自分が一生懸命考えて言ったことを受け止め、大切にしてくれる相手がいると、子どもは考えること、話を聞いてもらうことが楽しみになってくる。自分が考えたこと、感じたことをまた聞いてもらいたい、自分の考えや体験を共有したい気持ちになる。また、自分の意見が大切に切り扱われ、認められたという体験は、たとえ自分と同じ意見や考えを持たない人の発言であっても、聞いてみようという気持ちがある。

「給食は、みんなと一緒に食べられないでしょ。どうしているの?」



大きい声をみんなで出そう。それ、いち、に、さん。

「保健室で保健の先生と食べている。授業中は椅子に腰をおろしているだけ。休み時間は独りで教室にいる」

「授業中何もしないでも、先生は、何も言わないの?」

「言わない」

「友だちは?」

「何も言わない」

これは、両親が「大勢の友だちから見つめられていると、何も出来なくなるというか、体を硬くして動けなくなるのです。クラスの中でも、そっとしておいて下さい」と要望したためであるが……。

学校教師の対応に言及したいがこの稿のねらいではないので別の機会に譲る。

「それで、麻子ちゃんは、どう想って座っているの?」

「早くお家に帰りたいと……」

「休み時間に一人教室にいと、廊下から覗く人いるでしょう?」

「うん、だんだん体が固まっていくの」

「授業中じっとしているのは、辛いでしょう。」

「やでしよう」

「うん」

「自分で出来る勉強したら。算数の時間だったら、かけ算九九のところからやるとか。国語だったら、本を読んでいるとか。社会科だったら……：そうだ、先生がプリントを作ってあげるからワークをするとかさ。理科はちょっと難しいけど、考えてあげるよ」

「でも、私がみんなと違うことをしようとする、みんなが覗きに来るの。そうすると動けなくなつて、泣きたくなるの」

「そうか……困つたな……覗かないようにして下さいって、先生にお願いしてみたら」

「出来ない」

「そうね出来ないだろうな。……じゃあ、これも

お手紙で先生にお願いするのはどうかな」

「それなら出来る」という。

他者や環境を受け入れる幅が狭い麻子とコミュニケーションをとろうとすると、麻子の表情やしぐさの一つ一つから意図を探り、コミュニケーション可能なモードを限りなく探していく、その行為を麻子は「優しさ」と感じるのだろう。

親や教師には常に子どもの内面を、自身の心にあたかも感情移入するかのよう感じとれる敏感さと柔軟さが必要である。この敏感さと柔軟さがどれだけ優れているかは、子どもをどれだけありのままに理解しているかという態度に通じるのであり、これは「御仏の慈愛」に連なるのかも知れない。

共に生きる

— ブナ原生林から —

カメラマン・御所野洋幸

三月の撮影日記より

除雪車が通るのは、国民宿舍の森吉山荘までである。そこから撮影目的地までは、約十六キロの道程だ。

先月吹雪で入山できなかったが、三月も下旬になると雪の表面が堅くなり、新雪が降ら



なかったら楽に行けると山行の計画を立て、友人からスキーと靴を借りた。

三月二十二日、山荘を朝六時に出る、まだ暗い、前日の天気予報では曇りのち晴れである。懐中電燈は三十分程で不要になった。

体調もよし風もない、山の道路は雪で隠れ全部斜面になっているが、黄色いカーブミ

ラーの上の部分^が十センチ程出ている、それが目印だ。

六時五十分、太陽^が顔を出す、直横に近い光線^が雑木林の小枝まで長い影を作り無数の影の線^が斜面の起伏で波をうち、大海原のよう^だ、美しい、『雪よ、岩よ、我らー^が………』と歌い出す。山鳥^が驚いてバタバタと飛び立つ、野ウサギの足跡^が木の根元を縫うようについている。小枝^が凍りついて太くなり南の海のエダサンゴのよう^だ、それが朝の光を浴びキラキラと輝いている。

流れる汗をふきながらもその美しさに心^が満たされる。

私にとって美しいものとは、目で確認できるもの^のだけではなく風で木の葉のふれ合う

音、小鳥のさえずり、自然の香りなども、それが美しい風、美しい音、美しい香りになる。

私^がブナ林の撮影を初めたのは、広葉樹林の大切さと、その広葉樹林の代表であるブナ林の美しさ、自然の草木や動物と同じ空間で過す心地よさを、できるだけ多くの人々に知ってもらいたいと思ったからである。そのため撮影方法も特殊なレンズやアングルの変化をつけずに、だれも^が見ている普段の目の高さから撮り、自然そのままの写真、邪魔にならない写真^を心がけている。

美しい太陽と美しい風に感謝しながら登って三時間、東の又沢^が見えて来た、目的地までの中間地点である、これからは登りと降り^が交互になる。

山合に入ると雪質が変りスキーが二十センチ程沈む。ストックも時々用をたさなくなる。スキーの上下に雪がつき重く歩きにくい。身体のいろんな部分に異常が出てきた、目的地にたどりつけるだろうか、不安がよぎる。カメラも三脚も下ろしスキーも外して雪の上に仰向けに倒れる。さっきまでのルンルン気分も何もかも雪の中に沈んでいく。体力の過信、カメラ装備と食料、気持だけが先走り冬の山に一人で入山した事、色々の思いが頭の中を駆け回る。すぐに汗は止り寒さが全身をおそふ。ふるえる手でミカンを皮ごと食べキャンデーを口に入れる。また歩きます。こんな苦勞をしても自分が感動した景観を表現できるとは限らない、いや撮れる、撮れると信じる

事と、前に進むことしか考えないことにした。

雪の上に倒れるような休みかたを何度か繰り返し、十一時四十分キャンプ場にたどり着く。歩きだして五時間四十分だ。管理棟の屋根近くまで雪が残っている。そのうえ雪柵のため中に入ることは出来ない。ノロ川橋の下で肌着の汗を絞る。身体が重く思うように動くことができない。筋肉の疲れと寒さで全身がふるえ手持ちの撮影は不可能だ。三脚をスキーの上に固定しシャッターを切る。

あの逞しく優しく、生き生きしたブナの木はどうしたことだろう。みんな下を向いている。長い北風に力を吸いとられたかのようなだ。『オーイ、オーイ、元氣出せよう』と高い声で叫んでみた。やせた野ウサギが木の皮を食

秋田県森吉町ノロ川地区ブナ原生林の位置



べるのをやめて私を見ている。着ているものが全部湿っているので立ち止まると寒くなる。身体を動かし声を出し、画面の構成もなにも考えずに感覚だけでシャッターを切る。小雪が舞って来たので良い写真が取れたと云う満足感のないままに撮影を切り上げた。

八キロ程の難所を明るいうちに越えなければ冬山の装備なしで雪中で夜明けを待つしかない。夢中で歩いた。何度も倒れた。

午後六時十分雪明りで何とか山荘にたどりついた。手足の数ヶ所に豆ができ、それがやぶれて血が出ている。疲労困憊の極みである。とにかく帰ってこれた。何か、すくわれたと云う気持で思わず手を合せた。合掌——。

念仏と自由

大谷 隆照

私がお寺の生活に入ったのは二十七才の時です。大学時代に知り会った妻がたまたま寺のひとり娘だったため、そのようなことになってしまったのです。最初は妻も寺を捨てるつもりで、別の処で世帯をもったのです。

ところが、その寺は当時兼務住職だったので、す。というのは、住職になるはずの妻の父親は二十六才の若さで戦死してしまい、その後妻の祖

父にあたる人が住職を続けていたのですが、その人も妻が高校三年の時に亡くなり、その後近くの寺の住職に兼務をお願いしていたのです。檀家の方たちは、いずれは妻が婿養子をとって寺を継いでくれるものと期待していたのです。それが、寺を出てしまったのでは誰か他の人を住職に迎え入れるという話になりました。ところがそうすると、寺にいる妻の母と祖母の行き

場所がなくなってしまうということになります。妻と相談の結果、二人が寺に入るのがいちばんうまくおさまるのでは、ということになりましたが、ここでまた問題がおきました。私は長男で男ひとりなのです。今度は実家の母が私に寺に入ることに反対しました。そんなこんなですったもんだの末に私は寺に入ったのです。

よく世間の様々なしがらみを断ち切って出家するといいますが、私の場合はそんなかっこいいものではなくて、まさに様々なしがらみ故に出家、という形をとらざるを得なかったといえます。

こんな風に何の内的な必然性もなく寺に入れた私が、二十数年間まがりなりにも寺の生活を続けているうちに、お念仏を喜べるようになり、お寺に入って良かったと思えるようになってきたということは、考えてみれば本当に不思議な

ことです。

寺に入る前私はサラリーマンでした。医学書の出版社に勤めていました。給料はそこそこもらえましたが、時間に追われる毎日でした。疲れはてた身体で帰る電車の窓ガラスに映る自分の顔には、何の生気も感じられませんでした。このままでもいいのか。この先自分はどうなってしまうのだろう。こんな不安がいつも胸の底に澱のようによどんでいました。

その頃の私はサラリーマン生活を、全く受け身の形で生きていたのです。すべて押しつけられたものの、私の自由を束縛くするものとしてしか受けとれませんでした。ですから生活はいつも逃げ腰でした。

私の入った寺は本当に小さな田舎寺でした。それに兼務住職が長かったために寺は荒れていました。小さな本堂に庫裡とは名ばかりの堀っ

立て小屋がついていました。雪が降ると部屋の中まで雪が舞い込んできました。私は正直なところ三年がまんできるかどうかと思いました。

大学時代の友人が「おまえ、ここがまんできなかつたらどこにいつても同じだよ」といつてくれました。それもそうだと思い、少し本気で仏教にとり組もうと思いました。

少僧都養成講座で資格を得たのち、大正大学の大学院で二年程勉強させてもらいました。布教研究所でも学ばせてもらいました。その時々で御縁をいただいた先生や仲間たちによって、私は少しずつ仏教のもつ奥深い教えに目を開かれていきました。

仏教のどこに魅かれていったのか。それを言葉で表現することはむづかしいのですが、強いていえばそれは「限りなく自由に近づいていく道」に魅かれたということになるかと思います。

いまにして思えばサラリーマン時代の私が、無意識に求めていたもの、それは「魂の自由」ということだったと思うのです。解脱という言葉があります。私はこの解脱という言葉が仏教の本質を端的に表わしているように思います。私たちは様々な鎖、目に見える鎖、目に見えない鎖に二重三重にしばられています。肉体という鎖、家庭という鎖、社会という鎖、煩惱という鎖、偏見という鎖、差別という鎖、それらの鎖から徐々に解き放されていく過程が仏道の歩みのように思われます。

法然上人のお伝記や書き残されたものにふれますと、そこに本当に魂の自由を獲得した人格の、自在な働きをみてとることができると思うのです。例えば百四十五ヶ条問答という法然上人が様々な人々の疑問にお答えになったものが残っておりますが、それを読みますと、法然上人

がいかに權威とか当時の俗信あるいは偏見から自由であったか、ただ真理のみに忠実であろうとした精神の強さを知ることができると思うのです。

煩惱という鎖を説明するにあたつてよく貪瞋痴の三毒ということをいいます。貪と瞋はよくわかるのですが、痴ということが最初なかなかわかりませんでした。最近になつて私はこれを色メガネというように受けとめています。誰でも知らず知らずに何枚もの色メガネをかけています。それによつて真実が見えなくなっているのです。

私は寺に入つたとき「田舎なんて」という色メガネをかけていました。世話人会を開くたびに五分もあれば決まることに一時間も二時間もかけるやり方にイライラしていました。しかし、ある時私は気づいたのです。それはひとりの反対

者もなく全体が何となくそのように決まつていくという田舎の流儀なんだということに。結論は誰にもわかつているのです。それを誰が決めたいというわけでもなく、自然にそこに全体の流れが落ち着いていくのを待っているのに必要な時間だつたわけです。そう気が付いたときに、私の「田舎なんて」という色メガネははずされたのです。

「往生」とは、言い換えれば「魂の救済」ということになると思います。それでは「魂の救済」の中身は何かといえればそれは「魂の自由」ということだと思ふのです。ですから私にとつて「念仏と往生」は、「念仏と自由」というように置き換えられるものなのです。まさに、一称唱念しつこくだん桎梏断であります。

（茨城教区善照寺住職）

家庭への憧れと現実

私のアメリカ留学記(最終回)

佐藤雅彦



ハヴ・ア・ナイス・ウィークエンド

「研究留学ならパートナーを連れていったほうがいいよ」これは思いやりある先輩たちの出発

佐藤雅彦(さとうまさひこ) ●大正大学総合仏教研究所研究員、東京都文京区浄心寺僧侶。一九九二年五月より一九九四年三月末まで、アメリカ・ワシントンDCジョージタウン大学ケネディ倫理研究所へ。浄土宗海外研究生として「生命倫理学」を学ぶために留学。

前の助言だった。甲斐性なしの私は結局単身出
発したのだが、すると今度は「青い目の嫁さん
連れて帰って来い」と友人たちのエアメール
が続々と届く。たしかに初めての新しい生活は、

見聞きするものの全てが新鮮で、もしパートナーがいればこの感動を二倍以上にして共有できるのにと感じることもしばしばだった。

一週間の過ぎるのがとても早くアツというまに金曜日になっている。ワシントンの人々は、毎週、金曜日になると、みんな口々に、

「いい週末を過ごしてくださいね」

(Have a nice weekend.)

「あなたもね」

(You too) と、言葉を交わしあう。

私の暮らしたアパートは、十階建てが四棟、千五百世帯、約三千人程の人が住んでいるいわば団地なのだが、エレベーターの中で、または廊下で、面識がなくても顔を合わせただけで「ハアイ」と言つて「いい週末を」の挨拶をしあう。日常生活で見ず知らずのお互いが気軽に声をかけあう開放的な雰囲気は、アメリカ生活の初心

者の心を自然とリラックスさせてくれる。

そして「いい週末を」の挨拶、これは東京でのお寺の生活では考えられなかった現象だった。金曜日になると土曜、日曜のお寺の掃除や法務のことで頭がいっぱいになり、ただ慌たしさの中で週末を過ごし、日曜の夕刻にもなるとほっと溜め息をついて「やっと週末が終わったか」などと思うのとは大違いなのだ。

私の浅い観察だが、天気の良い週末には、家族はみんな揃つてさまざまな所へ出掛けていくようだ。家族を中心にして週末を過ごす、なるほどたしかに「いい週末」なのだろう。

家庭への憧れ

そしてたしかな観察によると、所謂カップルと見受けられる男女は、みんな手をつないで歩いている。十代や二十代だけでなく四十代も七

十代もだ。私の通うジョージタウン大学の食堂（医学部の病院がある）には、病院から食事にきた老夫婦がよく見かれた。車椅子に載った年老いた妻に七十代と思われる夫が、かいがいしく世話をする姿を見ては、こういう夫婦っていいな（無論その深層まで知る由もないが）と思ったりしたものだ。

お釈迦様が生きられた時代のインドで、四住期といわれ、人の一生を四つの時期に分けて家庭を設けてから修行に入ったというが、このような人生の線引きは、うまくできているなと思うことがしばしばある。というのは数年前あまり感じられなかった感情が理解できる感じが頻繁にあるからだ。二十代後半の頃はさほど感じられなかったのだが「子供は可愛いな」と思えるのだ。アメリカの子供たちが、日本の子供たちと比べて無邪気というのか、こましやかれて

いないというか、なんだか可愛いのだ。まあ自分がそういう歳なのかなと思うことにしていた。

ある時、面白い体験をした。私は、十七歳で伯父が住職をする寺に弟子入りして以来、巨大な団地に住むのは初めての経験だった。アパートの設計は一階から十階まで同じ様にできているので、私の部屋のトイレの場所は、一階から十階までトイレだろうし、ベッドのある部屋には同じく一階から十階まで大体、ベッドが縦や横に並んでいるのだろう（朝、トイレに座っていると、上で流す音なんかして）。

私の部屋は、五二八号室。隣の五二九号室には、五十代位の「オジサン」が家族と住んでいた。彼にはしばしば会うのだが、彼の家族には、とうとうその部屋を引き払うまでお目にかからなかった。

だが彼の子供は、とても小さいと察した。そして奥さんは、おそらく若いであろうということも。何故なら同じ立付けのアパートのこと、私のバスルームとお隣りのバスルームとは、壁一枚隔てて隣り合わせで、たまたま入浴時間が一緒だったりすると、聞くとはなしに声が響いてくる。

お母さんが、はしやいだり、ダダをこねたりする小さい子供をお風呂にいられている（正確にはシャワーを使わせている）声というのは、バス tub に漬っているとなんともほのぼのとして、ステキに聞こえてくるものだ。

それが不思議。お隣りさんは南米系（純粋な白人ではない）の人達で、英語というよりはスペイン語を話すのだが、私の耳にはそのお母さんと子供の会話が、

「良くつかりなさいよ」

「ダメじゃないの、ほらほら」

なんて調子の日本語に聞こえてくるではないか。暖かい母と子の会話が聞こえる度に、必然、家庭っていいな、と憧れの気持ちは募るようだった。

家庭の現実

それから一ヶ月後か暫く経ってからの話だ。

僕は、ゆっくり、ノンビリ、いつものように風呂に漬っていた。すると、聞こえてきたのは、女の人の（おそらく奥さんの）泣き声だ。泣き声というよりは、わめき声といった方が的を得ている。夫婦喧嘩だ。ご主人の声は、微塵も聞こえて来ない。もとより南米系の人は、情熱的で直ぐに興奮する人が多いことは知っていたがかなりのものだ。廊下やエレベーターで会うご主人はとても穏やかな人なのに、なんであんな

に奥さんを興奮させているのだろう。若い奥さんをもたって苦労しているんだろうな、なんて想像していると、ガシャーンと物を投げたか、壊したかの音が響いてくる。私は逃げるように風呂から上がった。

というわけで、家庭の両局面を見たような思いがして、少々、複雑な考察の機会を与えられたようだった。

それでも、本気で喧嘩をする相手のいることは、やはりステキだなと思うことにした。

『結婚の最良の選択』

渡米から四ヶ月が経った十月初めの頃のことだ。この頃ようやく映画を見に行くという楽しみをおぼえだしていた。もっとも独り者には、ビデオを見るか映画に行くかがアメリカの若者にとってもスタンダードな週末の楽しみ方だ。

アメリカの映画は安い。六ドルあればロードショーが見られる。週末ともなれば日本の平均的な映画館の半分くらいだろうか、小振りな映画館が学生や家族連れで満員だ。言い訳がましいが映画は英語のヒヤリングの勉強にも最適だった。八月に英語の先生と一緒に初めて映画館に行ったとき、その会話の速さには印象に内容を止めるどころの騒ぎではない。確かアル・パシノが出演していたなという程度のものであった。しかし一作見る度に、確実に自分のヒヤリングの能力は進歩していることが実感できる、それが楽しかった。

この日の映画は、その名も『ベスト・インテンション』（結婚の最良の選択）。最近、ちっともロマンチックでないなと思い、ワシントン・ポスト（新聞）の「今年一番、ロマンチックな映画」「カンヌ映画祭のグランプリ受賞作品」「抒

情的な美しい映像」という広告を見て「これだ！」と意を決して勿論独りで出かけた。

ワシントンでも一カ所しか上映していない特別ロードショーなので、地図を片手に迷い迷い、辿り着いた。コカ・コーラを買って席に着き、しつかり聞かなくや、なんて気合を入れて固唾を飲み込んだ。予告編から美しいメロディの後、本編へ。と・こ・ろ・が・

映画は、英語ではなかったのだ。おそらく、ドイツ語だったのだろう。外国の映画を観るのに日本語の字幕スーパードというのは、見慣れていたが、ドイツ語の映画に英語の字幕スーパードというのはこれまた初めての経験だ。読んでいるそばから字幕は移り代わり、速いこと速いこと。眼で追っただけで疲れてしまうものだった。それに加えて、題名の『結婚の最良の選択』とは、宗教家の結婚を題材にしたものだった。

主人公は貧しい神学生。資産家の跡取り息子を友人に持ち、彼の妹と恋仲になる。彼女たちの家庭に招かれたとき、今までぐぐったこともないような大きな屋敷の門に入る。

彼は卒業後、牧師となり宗教家としての道を歩み始める。二人の恋は彼女の両親の激しい反対にあい一度は離れていくのだが、彼女の父の死をきっかけに、彼女の母は柔軟な態度を見せ、二人は結婚することになった。

牧師として駐在する僻地の教会を二人で見に行った。これから宗教家として活動するその教会で挙式を上げようと彼は提案する。しかし彼女は、親元で多くの人を招いて盛大に行うことが夢だったと主張する。その諍いは、これからの二人の前途を占うかのように重たい雲がかかった気配だった。

荒れ果てていた僻地の教会は、彼らが住み着いたことで修繕され、次第に整備されていった。そして彼の真面目な伝導の生活姿勢に人々の信望は集まってきた、廃墟だった教会は見違えるように活気に満ちたものになって行く。彼女は彼を支え、その後生まれた彼らの子供の育児や家事に精を出す。日曜日にはミサが行われ、彼女はオルガンを弾き、彼は説教をする。すべてがうまくいっているとき、二人合わせた力が三人以上に発揮されたかのようにだった。

躓^ずきの石に一度足を掛けるとバタバタと転がっていくように、不幸はやって来る。僻地でも人々に信望の厚い若き牧師がいるという評判は、教会の本部にもいつの間にか伝わっていた。ある日、彼らはオランダのストックホルムにある教会本部に招かれる。それ相当の住居や待遇を用意するから、ストックホルムにある教会に

赴任してくれないか、といわば栄転を促される。彼は一も二もなく「小さいけれど私たちには、私たちを必要としている街の人々がいますから」と断りを申し出る。無欲な彼にとつては、日々つつがなく伝導活動ができる今の教会で満足だった。彼女は元より華々しい生活の中で育っていた身上、都会に出られることはこの上ない喜びだった。しかし彼女は、彼が彼女に何の相談もなく彼一人の意思で断ってしまったことに腹を立てる。そんな事件が一つの契機になって、二人の間には次第に溝が広がり始める。

やがて彼女は、子供を連れて実家へ帰って行く。二人で三人以上の力を出して支えられてきた教会は、彼一人になって人の出入りもすっかり廃れていった。幾月か経って、彼は彼女を訪れた。彼女は実母と子供と楽しそうに散歩をしていた。そして言葉を交わす。

確かにその場面の影像是、感動的に美しいものだった。しかし、字幕スローパーの速さに二人が仲直りできたのか、別れて行くのか、結末の決定的な言葉を、しつかり掴まえられないまま、物語は終わってしまったのだ。

祝電屋という現実

その悔しさのために、次の終末、僕はもう一度、映画館に行った。今度は分からない単語は、ノートに書き留めるため、真っ暗な館内にメモと鉛筆を持参した。そして結末は「私を許してください」と互いが互いを悔いるのだが、その「許し」とは、修復の効かない決裂のための「許し」でしかなかった。

なるほど現実というものは、育ってきた環境やら基本的な価値観も重要な問題だな、なんて今更ながら考え込んでみたりして。

そんな訳で、私の「結婚」についての思索と模索は帰国した今も続いている。

それでも私にも留学したお蔭で新しいニックス・ネームがつけられた。「祝電屋」という。何組の同輩、後輩に祝電を送ったことだろうか。「アメリカ大統領クリントン」という祝電の冒頭が司会者によって読まれる度に、披露宴会場に喚声が起こるというのだ。無論、電文はその後「の母校・ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所研究員の」と続くわけだ。

留学という改めて自分の内面と対座する縁を得て、寂しがり屋の私には家庭という温かさに憧れる思いはいよいよ深く募るのだが、法然上人がお諭し下さる宗教的目標、「念仏」の為にパートナーへの憧れの思いを、保ち続けて生きたい。

阪神大震災・義援金、ボランティアのお知らせ ＜被災地からの緊急レポート＞

「物資は十二分に届いてはいる。これからは被災者へのマインド・ケアだ。これが二月始めの現地の声でした。」

本誌が皆さんのお手元に届く二月末時点での被災地の状況に変化があるかもしれないませんが、被災者へのマインド・ケアはより必要となっていると思われます。また、長びく復興のための義援金も必要です。そこで私ども「浄土」では本誌にいつもご協力いただいています。超宗派仏教団体、「南無の会」

「アーユス」の現地救援本部と連絡をとり、義援金の窓口と現地ボランティアをうかがいました。できる限りのご協力をお願いいたします。

●神戸南無の会への義援金振込口座

神戸信用金庫 学園都市支店 ⑧〇

二一〇〇七二〇二〇 ボーイスカウトコウベ дайナナジュウヨンダン

イクセイカイ（連絡先 神戸南無の会代表 宮下玄寛 〇七八七九三二

六一〇）

●アーユス（仏教国際ネットワーク）への義援金振込口座 三菱銀行 深川支店 ⑧〇六八八九六五 アーユス

ブッキョウコクサイキョウリョクネットワーク дайヒョウシゲタマスマミ

（連絡先 アーユス関西 〇六一七七一七六四二）

⑨現地ボランティアについては詳細を連絡、相談の上、現地におもむき下さるようお願いいたします。

「今こそ被災地に僧侶が……」

神戸市長田区の被災地より

時衆 平尾弘衆

私は26日の夜、A M D A（アジア医師連絡協議会）のメンバーと神戸市長田区へ現地入りをしました。夜は長田区役所の廊下で被災者と同様に寝袋にくるまって寝るだけで、朝から夕方まで定期的に単独行動です。

始めのうちはどうやって声をかけていいものか勇気がいりました。でも、最初に入った兵庫高校では教頭先生が「助かります。みなさんの相談にのってあげて下さい。最近ではストレスやイライラが原因でもめ事が増えて、世話をする先生も疲れきっているんです」といわれ、思いきって被災者の中に入りしました。案ずるより産むが易し

「どうですか。何か足りないものはありますか？」と声をかけると、ほとんどの様子で胸につかえていたものを一気に吐きだすように話し始めてくれます。一人のおばあちゃんに二時間かけて話を聞くこともあり、なかなか多くの人に接することはできません。

避難所について困りの人と活発に話している人は大丈夫ですが、無気力にふとんをかけている人は要注意です。声をかけても視線を合えないようにする人はすでにうつ状態に入っています。精神科のお医者さんにかかるほどではなくても、紙一重の状態は被災者

の殆んどに見受けられます。中にはグラウンドに設置した仮設トイレに行くのが大変で、がまんをしているうちに下着を汚してしまい、それが恥ずかしくて痴呆がでてしまった年寄りも少なくありません。

すでにYMCAが、天理教や創価学会の人達が精神的ケアに立ち上がっています。でも被災者は私の改良服を見て「その法衣姿はつとします」とみなさんいわれます。

遺骨に線香すらあげることでもできず枕元においている遺族もたくさんいます。宗旨が違ってもしょうけれど、お経をあげる人はほとんどいません。

自衛隊も消防隊も警察もボランティアもみんな心は一つです。いかに被災者を助け、この神戸の町を復旧させるか。現地に入ってきた人は、宗教やイデオロギーの違いなどどこかにふつと忘れてしまっています。

何はともあれ一人でも多くの仏教者がこの神戸へきて欲しいのです。既成仏教が今こそ生まれ変わる時です。そのためには、バラバラに行動しないで、宗派をこえたネットワーク作りと現地での行動拠点を一本化する必要があると思います。

新刊 紹介

『法然上人伝』

大橋俊雄 訳

今回ご紹介するのは、大橋俊雄先生(横浜西林寺住職・文学博士)による「法然上人行状絵図」の現代語訳、『法然上人伝』上下二巻です。「法然上人行状絵図」(一般に「四十八巻伝」または「勅修御伝」)は上人を知る上には必読の書ですが、この現代語訳が昨年末、春秋社より出版されました。これは既刊の『法然全集』(二巻本)の別巻として出されたもので、非常にわかりやすく、親しみやすい文体、体裁は初学者にも好適と言えます。訳のみならず、詳しい脚注、そして下巻末には同伝記の成立年次、撰者等についての深い考察、さらには索引も附されていて、微細を極めて、理解できるように」という師のモットーがそのまま本になった労作です。

誰にでも読みやすく、特に能化にとつては『法然全集』とともに、是非とも座右に置きたい名訳としてお勧め致します。



★投稿募集★

- ①随筆・詩など…四百字詰め原稿用紙十枚以内。
- ②俳句・川柳は二句、短歌は二首まで。
- ③その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりとお気軽にお聞かせ下さい：適宜。

投稿は随時受け付けております。ただし採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却致しませんので必ずコピーをお取りの上お送り下さい。

皆様の投稿をお待ちしています！

連絡先

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園四―七―四
明照会館内
TEL 〇三―三五七八―六九四七
FAX 〇三―三五七八―七〇三六

編集



後記

仲春のつぎはぎの雲と漂い

(田口満代子)

●寒さはまだまだ厳しくとも、春の気配をちらつと感じさせる雲が時折顔を出してくれました。そんなつぎはぎの雲を見ていると、絶望の心境も救われる思いがいたします。神戸の人々にも、はやく希望の見える春が来てほしいと祈ります。

●今月号ご執筆頂いた、住吉俊彦先生と倉田保雄先生は、両先生とも新生の『浄土』二度目のご執筆です。

倉田先生は、一昨年八月号に「巨悪も死ねば惜しい人？」という、さすが国際問題評論家という国際的感性をお示し頂いた文章をお書き頂き、今回もなかなか厳しいご指摘を頂き、私自身思わず姿勢を正していました。

住吉先生は、昨年六月号に「想いでづくり」という、自ら胃ガンを宣告され、九死に一生を得た体験をお書き頂き、またご記憶の方も多いと思います。その原稿にもありましたように、現在高齢者福祉ボランティアとして活躍の月刊誌『ちいさレポート』を独自で創刊され、ライターとして活躍されている先生で、今回は高齢者福祉に対する真摯な思いを語って頂きました。

●小磯千尋先生は、インドにすっかり

はれこんでしまい、留学までされてインド文化を学ばれ、インドの人々とともに生活をされていらつしやる先生で、本当の意味で、内から見たインドを語ることができ、数少ない先生です。

●大谷隆照師は、関東で活躍の中堅の布教師です。お念仏について、自らの体験からのお原稿をいただきました。

●佐藤雅彦師は、アメリカ留学記の第三回目です。若くして家を出て、寺に入っていた佐藤師の、家庭に寄せるせつなな思いを感じ取って下さい。

●大地震が次々に起き、不安な思いが募る今日この頃です。今回のような苛酷な状況になったとき、逆に人間の思いやりと優しさ強く教えられたような気がします。ボランティアでかけつけた若い僧侶から、本当の意味での宗教を初めて学んでいますという話を聞きました。

これからが大事だということをつくづく感じます。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
齋藤晃道

栗田順一
村田洋一
太田正孝
石上俊教

浄土

六十一巻 三月号 頒価六百元
年会費六千元

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成七年二月二十五日
発行 平成七年三月一日

編集人 宮林昭彦
発行人 牧田諦亮
印刷所 日経印刷株式会社

〒一〇五 東京都港区芝公園四七四明照会館内
発行所 法然上人鑑印会
電話 〇三三五七八 六九四七
FAX 〇三三五七八 四〇三六

訂正とお詫び

1月号、二十八頁次四行目、「江戸川区の深川江戸資料館は、江東区の深川江戸資料館」の誤りでした。訂正してお詫び致します。

2月号、21頁の涅槃図の写真の左右が逆になってしまいました。お釈迦さまは右を下に横になられています。ここに訂正してお詫びいたします。



S★PPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール

カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎてから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を導く最大の要素は、その姿とかたちである。
つくり手の強い意志が感じられる姿と、それを忠実に具現化した正統のフォルム。すなわち、かたちである。
まず、姿がいい、かたちがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロアム
VIP ● 全長4800×全幅1745×全高1410(%) 主な装備 ● VG30DET (V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc) エンジン ● 最高出力255PS/6000rpm (※NET値) ● 最大トルク35.0kgm/3200rpm ● フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT) (※NET値) とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同条件で測定したものです。日産自動車株式会社お客様相談室 ● 全国共通フリーダイヤル0120-315-232 ……………お近くのローレル販売会社へ。